





社会貢献者表彰とは

国の内外を問わず、社会と人間の安寧と幸福のために貢献し、顕著な功績を挙げられながら、社会的に報われることの少なかった方々を表彰させて頂き、その功績に報い感謝することを通じてよりよい社会づくりに資することを目的とする。

第55回社会貢献者表彰の概要

【募集告知】

2019年8月より、ダイレクトメール発送、新聞への告知広告、当財団ウェブサイト等にて

【対象となる功績】

- 社会貢献の功績

【候補者について】

- 候補者には、年齢・職業・性別・信条・国籍等の制限はない
- 日本で活動する方、もしくは海外で活動する日本人を対象とする
- 候補者は、同種の功績により当財団の「社会貢献者表彰」を受賞されていない方とする
- 候補となった功績と同一または同種の功績により、既に国の栄典（叙勲、褒賞）または、大臣表彰等を受賞されている方は、選考の際、後順位とされる
- 人命救助に関する功績については、原則として、2018年11月30日以降の功績を対象とし、この功績の場合のみ、当該行為により亡くなられた方を含む

【選考について】

選考委員会開催日：2020年1月22日

【受賞者】

受賞者：41件（うち人命救助に関する功績2件）

【表彰式】

開催日：2020年11月30日 於帝国ホテル東京

受賞者には表彰状、副賞として日本財団賞（賞金）を授与する

奨励賞

過去に社会貢献者表彰を受賞された方で、引き続き顕著な活動を継続され、使用用途が明確な事業等に対して当財団の運用益から「奨励賞（賞金300万円）」を贈呈

【受賞者】

第47回受賞者「認定 NPO 法人女性と子ども支援センター ウィメンズネット・こうべ」

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けている女性や子どもたちへ支援を拡充するための費用

第49回受賞者「上原淳」

運営している川越救急クリニックの、コロナ対応に向けてCTの買い替えの一部資金等

受賞者手記目次

第55回社会貢献者表彰受賞者 41件（敬称略）

安達 聖澄 保科 馨	032
小旗 はるみ 河合 京子	034
石坂産業株式会社	036
NPO 法人樹木・環境ネットワーク協会	038
NPO 法人地域環境デザイン研究所 ecotone	040
有限会社アップライジング	042
NPO 法人子どもの家足立	044
村田 純子	046
山本 忠	048
認定 NPO 法人ザンビアの辺地医療を支援する会	050
バグサンハン児童救援協会	052
Paix ² (井勝 めぐみ 北尾 真奈美)	054
NPO 法人アニマルセラピー協会	056
大分工業高等専門学校 足踏みマシンボランティア部	058
NPO 法人キッズスポッチャ	060
金城 雅春	062
岩本 功	064
NPO 法人10代・20代の妊娠 SOS 新宿 - キッズ&ファミリー	066
NPO 法人エスペランサ	068
NPO 法人 Fine	070
一般社団法人石巻海さくら	072
小早川 明子	074
NPO 法人松本ヒマラヤ友好会	076
NPO 法人ルワンダの教育を考える会	078

KURATA PEPPER Co., Ltd.	080
じゅんちゃん一座	082
NPO 法人やどかりサポート鹿児島	084
星川 安之	086
NPO 法人わびねす	088
一般社団法人日本摂食障害協会	090
特例認定 NPO 法人とりで	092
根津 さゆり	094
風疹をなくそうの会『hand in hand』	096
増井 さち	098
瀧 香織	100
NPO 法人セカンドハーベスト京都	102
株式会社クラダシ	104
一般社団法人小さないのちのドア	106
ほうき民話の会	108
田中 ルーデス 千江美	110
NPO 法人 Accept International	112

対象となる功績内容

- ▶精神的、肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- ▶困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧・幸福のために尽くされた功績
- ▶先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績
- ▶海の安全や環境保全、山や川などの自然環境や絶滅危惧種などの希少動物の保護に尽くされた功績
- ▶海難、水難、交通事故、遭難等に際し、身命の危険を冒して救助、救援に尽くされた功績
- ▶犯罪等の発生に際し、身命の危険を冒してその解決に協力された功績
- ▶災害、事故、犯罪の発生を未然に防いだ功績

安達 聖澄／保科 馨



山形県

2019年7月24日(水)、山形市内では、夕刻からひどい雨が降り、19時半までの1時間に38ミリの雨が降るなど、局地的な大雨であった。市内各地では、冠水による通行止め、側溝から溢水被害等が発生していた。当日19時45分頃、安達さんは、自家用車に保科さんに乗せて運転中、丁字路を左折しようとしたところ、左前方を自転車に乗って走っていた男子高校生の姿が突然見えなくなった。安達さんは不審に思い、車を停めて辺りを確認したところ、高校生が乗っていた自転車が水路に転落しており、身体はくの字の状態で何かに

引っかかり流されずに、頭部まで水没している高校生を発見した。ふたりは、水路に入り、腰の高さまで水に浸かりながら高校生の身体を持ち上げ、水路から救出した。道路上に救出した頃には意識を取り戻した高校生は、目の焦点が合わない状態であった。声掛けをしながら救護を続け、救急車が到着する頃には高校生の意識状態は会話ができる状態まで改善した。

後日、自転車が落ちた水路脇にガードレールが設置された。

(推薦者：山形市消防本部 消防長 平吹 正人)

それは、一瞬の出来事でした。

その日は、夕方6時から開催される町内会の会合に参加するべく普段は歩いて向かうのですが、小雨が降っていた事もあり自家用車で向かいました。保科さんと私は、同じ町内の子供会役員として会合(以降、会)に参加しておりました。夕方からスタートした会でしたが、次第に雨も小雨からバケツをひっくり返したようなゲリラ豪雨に代わり、会の最中にも何度か全国瞬時緊急警報システム(Jアラート)も鳴り始めたため、予定より早く会は終了しました。自宅が近所という事もあり私の車で一緒に参加していた保科さんを自宅まで送って帰る事になりました。いざ車を走らせると、ワイパーが役に立たない位の大雨で道路は所々で冠水しており、大通りでは冠水の影響で交通規制が行われて一部では渋滞も発生しておりました。自宅より数百m手前の信号機の無い交差点に差し掛かった時、左折待ちをしていた私の視界に自転車に乗った男子学生の姿が見えてきました。学生は自宅への帰宅途中だったそうです。私は、学生が右折し終えたら左折しようと考えて待機しておりました。

その時です。私の車の前を通り過ぎる学生が突然私の視界から消えました。あれっ?まさか……。

この交差点は、手前にガードレールがありすぐ側を小さな川が流れています。ガードレールから川までは2m以上の落差がありました。普段は水流が少ない川のため危険な川であるという認識はあまりありませんでした。ガードレールとガードレールの間には、3メートル位の隙間がありました。学生は眼鏡をかけて自転車に乗っていた事もあり、当時は視界が悪く誤ってそのガードレールの隙間を通れる道路だと判断してしまい、川に転落したのです。

私は、車を左折し助手席にいた保科さんに今の事情を説明し学生の救出に向かわせました。車を安全な所に停車させた私も救出に向かいました。慌てて現場に向かって行くと、側溝の中に浮いている自転車が見えてきました。私は自転車をすくい上げ、安全な場所へ移動し終えた時でした。

「安達さん、ヤバイ。助けて！」

私は声がする方向に目を向けると、あの小川は激流となり道路の下を勢いよく流れる恐ろしい川に変化している光景が目に入りました。その側溝の中から全身水に浸かりかろうじて見える手だけを必死に掴んで今にも流されてしまいそうな学生の救助を求める保科さんの姿が飛び込んできたのでした。私は夢中で側溝の中に飛び込みました。その時、私と保科さんに恐怖心は無く、ただただ無我夢中で助けなきゃという思いの行動だったと思います。増水した川に入り腰上まで水に浸かりながら学生をなんとか陸まですくい上げました。学生は救出直後、意識がない状態だったのですが、陸に到着するまでに意識は回復しておりました。救急車要請をした後も、意識確認や身元確認など絶えず声をかけ続けました。親御さんへ連絡をしたいと伝え、連絡を入れました。

学生は唇からの出血と、落下した影響で左足の痛みがあるとの事で安全な所に座らせて止血処置をしました。眼鏡と履いていた靴は流されてしまったのですが、尊い命が助かって本当に良かったと思っております。



ます。後日、退院されお礼に来てくれた時の本人の元気な笑顔が今でも忘れられないです。

あの現場には後日ガードレールが新設され事故再発防止措置がされました。

あの時の出来事は一生忘れる事は無いと思います。また、あの現場に私1人だけ直面した場合であっても果たして同じ事が出来たのか、それはやっぱり2人だからこそ協力して冷静な判断をし行動できたのではないかと思います。

最後になりましたが、この度は、公益財団法人社会貢献支援財団の人命救助の功績の決定及び、表彰式典に御招待いただき誠にありがとうございました。本来であれば、表彰式典に参加し他の受賞者との交流会に参加したかったのですが、昨今のコロナ事情により不参加になってしまった事を大変申し訳なく思っております。

これからも受賞した喜びと同時に気を引き締めて行動していきたいと思いました。

この度はありがとうございました。

安達 聖澄

令和元年7月24日の出来事です。安達聖澄さんと私は町内会の子供会役員として夕方6時から開催される会合に参加すべく普段は歩いて行ける所ですが、小雨が降っていた事もあり安達さんの家用車で向かいました。夕方から開催された会合でしたが次第に雨の降り方も激しくなりバケツをひっくり返したようなゲリラ豪雨に代わり、会の最中も携帯に数度全国瞬時緊急警報システムのJアラームが鳴り予定より早めに会合は終了しました。

帰りも安達さんの親切で車で送ってもらう事になりました。車を走らせると雨の降りが一段と激しくなりワイパーが役に立たない位の大雨になり道路は所々で冠水し幹線道路では交通規制が行われてアンダーパスは通行止めになり渋滞も発生しておりました。

自宅近くの信号機の無い丁字路に差し掛かり左折待ちしていた時に帰宅途中の自転車に乗った男子学生の姿が見えました。男子学生が通り過ぎるのを待っていたところ、車の前を通り過ぎる瞬間、男子学生の姿が一瞬で消えました。この交差点はガードレールがあり道路の側2m位下を小さな川が流れておりますが普段は流れる水量も少なく川がある事は解りづらい所です。ガードレールは間隔が開いて設置されており1m位の隙間がありました。男子学生は大雨の影響で視界が悪く誤ってガードレールの隙間から下の川に転落したようでした。安達さんから声を掛けられ車を降り、男子学生を救出に行きました。安達さんは車を安全な所に停車させから駆けつけて来ました。現場では川の水が溢れ側溝に浮いている自転車があり小川が激流に変わっていました。男子学生は全身水に浸かっていました。かろうじて見える手を掴み、安達さんに声を掛け今にも流されてしまいそうな男子学生を無我夢中で助けるため、川の中に入りました。川の流れる先は道路の下を流れるためトンネルになっており男子学生の手を離すまいと必死でした。安達さんと私は水に浸かりながら男子学生をなんとか陸の上まで引き上げました。救出直後、男子学生は意識がない状態でしたが徐々に意識が回復しました。救急車を要請し男子学生の容態を見ながら身元の確認をしながら声を掛け続け、親御さんへの連絡先を聞き連絡しました。唇からの出血と左足の痛みがあるとの事で安全な所に座らせ、止血処理をして救急隊員が来るのを待ちました。自転車は引き上げましたが男子学生が身に付けていた物は流されたようです。後日、退院してきた男子学生の姿をみて嬉しくなりました。



▲救助の現場

あの時は二人とも救出の事だけ考え行動していたのですが、後に思いたすと恐怖心が湧いてきます。二人で協力して出来た事で一人では無理な行動でした。

この度は、公益財団法人社会貢献支援財団の人命救助の功績の受賞及び表彰式典にご招待いただき誠に有難う御座います。本来であれば表彰式典に参加したかったのですが、昨今の事情により不参加となり大変申し訳なく思います。

ありがとうございました。

保科 馨



▲山形市消防本部消防褒賞 令和元年8月29日

小旗 はるみ／河合 京子



新潟県

2019年8月18日の午後0時半頃、小旗さん、河合さんの姉妹は家族とともに新潟市中央区の日和山浜海水浴場に遊びに来ていた。小旗さんも河合さんも、普段からプールに通い泳ぎは得意で、この日も水着、足ヒレ、ゴーグルを持参し着用していた。当日は、遊泳禁止になっていなかったが、台風の影響もあり、海は荒れ気味であった。すると監視員の何か叫んでいる声が聞こえた。海岸から100メートル程の沖を浮き輪に乗った男性に、戻るように叫んでいるようであったが、救助要請をするためか監視員は、そこから居なくなった。

この辺は流れもあり、このままでは男性が流されてしまうと思った小旗さんはすぐ脇の縦堤（棧橋）の中ほどから、海に入り男性に向かって泳ぎだし、河合さんも縦堤に掛けられていた救助用の浮き輪を持って、その後に続いた。男性の所まで来ると、男性はパニック状態で「助けてくれ！」と必死で、浮き輪に乗っていることで、むしろ自由が効かず、自力では戻れなかったようだった。二人で男性を引っ張って縦堤に辿り着き、レスキューの人に男性を引き継いだ。

（推薦者：石井 幹人）

この度、社会貢献者表彰式典におきまして大変栄誉ある賞を賜り心からお礼申し上げます。コロナ禍で、受賞された方々とは交流が難しかったのですが、本当に有意義ですばらしい時間を過ごささせていただきました。安倍会長はじめ社会貢献支援財団の皆様、本当にありがとうございました。

2019年8月18日の出来事は忘れることができません。その日の午後0時半頃、娘夫婦、高校生の孫、妹といつも親しんでいる海水浴場に遊びに行きました。台風の影響もあり、海は荒れていました。スポーツクラブのプールで泳いでいるのですが、子どものころから海は大好きで60代になっても妹とは毎年来ています。

どんどん波も高くなって、監視員の何か叫んでいる声が聞こえ、海岸から100メートル程の沖を浮き輪に乗った男性に戻るように叫んでいました。自力では戻れないと判断したのか、救助を求めるためか監視員はそこから居なくなりました。どんどん沖の方に男性は流されてしまいそうでした。

とっさに妹に「行くぞ」と言い、ゴーグルと足ヒレを持ち、岸からは到底追いつかないと思い、脇の棧橋に走り、中ほどのテトラポッドから飛び込みました。「助けるぞ！」と男性に辿り着いた時はほっとしました。大柄な男性でなかなか棧橋に辿り着けませんでした。妹も手伝いなんとか近くまで泳ぎ着きました。レスキューの方もビックリしていたようでした。警察の方は私たちの年齢を聞いて、こちらでもビックリされていました。観光に来ていた中国の男性と後から聞き、パニックになったのと、言葉がわからなかったようです。家族の方から何度もお礼を言われて恐縮しました。

無謀なことをしたかなと少しは思いましたが、泳ぎ着き助けられて良かった！という達成感がありました。

今日もプールでガンガン泳いでいます。まだまだ人一倍お節介と正義感一杯のおばちゃんです。

小旗 はるみ



この度は誠にありがとうございました。

日本の内外で素晴らしい活躍をなさっている方々がたくさんおられるということに改めて思い知らされました。そのような方々を発掘し功績を讃え表彰して下さる公益財団法人が存在するというのも初めて知りました。

帝国ホテルという一流の会場での式典、役員の方々の面々、何もかもが素晴らしいものでした。とても晴れがましい気がいたしました。2020年のコロナ禍という稀有な状況の中、骨をおられとてもご苦労なことだったと思います。改めて感謝を申し上げます。

2019年8月18日の救助をふり返ってみます。

姉（当時69歳）と私（当時67歳）のファミリー5人で新潟市の「日和山海岸」に、その日は台風の影響もあり海はしけ模様、波はザブンザブン。とても泳げるような状況にはありません。仕方ないのでお弁当でも食べながら日光浴などと…。そんな時、パトロールをしていた監視員が沖に向かって叫んでいます。見ると浮き輪が沖に流されていっているようです。

監視員がメガホンで大きな声で叫びますが、波の音で届かないようです。体を大きく動かし必死で「戻れ！戻れ！」と浮き輪の方も何やら手をあげているようですが、どうやらリップ・カレント（離岸流）が起きていて戻ってくるのができないようです。だめだと思いきやレスキューを要請しました。それを見て姉が何やら支度を始め「行こう」といいます。私は「エーッ」と思いましたが体はゴーグルと足ヒレをすぐに用意（これは海に行くときにいつも持っていきます）していました。

姉は週2、3回ほどプールに通っており、私はスキューバダイビング、スキューバダイビングを何年もやっています。子どもの頃から親しんでいる海なので、ここの地形も知っております。砂浜から行ったのでは押し戻されそうなので、縦堤から入ろうと走って行きました。姉が先に飛び込み、私は設置してある救助用の浮き輪をはずし続けました。さすがに足は震えていましたし、監視員の方にも止められました。

浮き輪に辿り着いたところ、その方は中年の男性で声も出さずパニック状態であったと思います。2人で「大丈夫、大丈夫だから」と言いながら必死で引っ張りレスキューに引き継ぎました。

岸では警察、レスキュー、パトカー、救急車、消防車がたくさん来ていてとてもびっくりしました（こんなに大事だったの…？）。

後でわかったのですが、男性は30代で中国籍の方でした。60代後半の姉妹が30代の男性を救助したということで、全国ニュース、ローカルニュース、新聞社も3社と大分マスコミに取り上げられました。

後でつくづく勇気のある行動だったと思います。とにかく大好きな海で3人とも無事で、事故が起きなくてよかったです。 河合 京子



▲小旗さん河合さん姉妹



▲日和山海岸



▲多くのメディアで報道されました

石坂産業株式会社



専務取締役
石坂 知子

埼玉県

石坂産業株式会社は1967年に埼玉県入間郡で産業廃棄物処理業社として創業した。1999年、後に誤報と判明するが、農産物がダイオキシンの汚染されているという報道をきっかけに、地域住民からの反対運動が勃発し同社は窮地に追い込まれた。創設者の長女石坂典子さんが社長に就任し、2001年に焼却事業から完全撤退して建設系廃棄物の資源化に事業転換を図る。同社は「ごみにしない技術」を探求し、廃棄物を100%再資源化する先端技術の確立を目指すとともに地域社会に必要な会社づくりを開始。社員による近隣道路の清掃ボランティアに始まり、地域の荒廃した雑木林を再生する里山再生プロジェクトをスタートさせた。「三富今昔村（さんとめこんじゃくむら）」と呼ばれるその里山は、年に4万人が訪れ、誰もが豊かな自然を楽しめ、五感で学べるサステナブルフィールドとなり、同社が運営する環境活動の学校「くぬぎの森環境塾」の活動の場となっている。毎年小学校から大学生まで約5,000人を受け入れ、体験型環境教育を無償で実施しており、埼玉県から「体験機会の場」第一号に認定されている。また生物多様性保全への取り組みは公益財団法人日本生態系協会が国内最高ランクの“AAA”に認証した。

(推薦者：株式会社バン・アキモト)

このたびは、社会貢献者表彰を賜りまして、誠にありがとうございます。大変光栄に思います。財団の皆様、ご推薦いただいた秋元様には深く感謝を申し上げます。

弊社は、埼玉県三芳町で建設廃棄物の資源化事業を営んでいます。弊社の経営ビジョンを多くの方々に共感していただき、メディア等に取り上げられる機会が増えたことから、「ゴミ・産廃屋」の看板が外れ「再資源化産業」と、一般の人々に徐々に認知されるようになりました。

ここまでの道のりは険しく、紆余曲折の連続でした。創業者は、資源を使い捨てるのではなく、これからはリサイクルをしなければならないと考え、1967年に「石坂組」のちの石坂産業株式会社を起業しました。

しかし、1999年、埼玉県所沢の農産物がダイオキシンの汚染されているという報道（のちに誤報と判明）をきっかけに、地域の産業廃棄物処理会社は住民からの反対運動に遭いました。当時、弊社の焼却炉はダイオキシン対策炉でしたが、住民からの理解を得ることは難しく、会社は窮地に追い込まれました。

創業者である父の、会社にかける強い志を知った私（現代表である石坂典子）は、その意志を継ぎたいと父に直談判し、代表に就任しました。

そして地域に愛され、必要とされる会社になりたい。そこで働く社員が自分の仕事に誇りをもてる職場を創りたい。その一心で、脱産廃宣言し廃棄物を燃やして縮減する“処理事業”から、“再資源化する事業”に業態転換を図りました。地域住民や農家の皆さまと共生する環境配慮型の先進式資源化施設を建設しました。

江戸時代から続く会社周辺の雑木林（里山）が荒廃していました。美しい里山を取

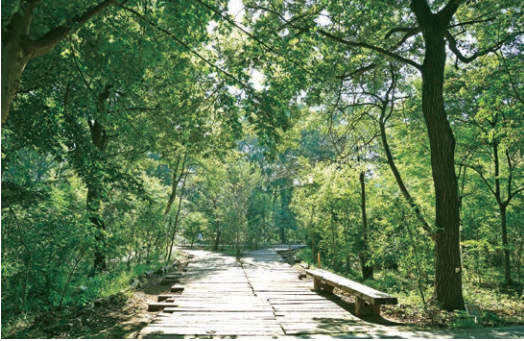


り戻す、保全再生に取り組みました。生物多様性保全の管理を行い、(公財)日本生態系協会の JHEP 認証制度では、最高評価の「AAA」認証を取得。絶滅危惧種の植物が、毎年、株を増やしています。

保全再生した里山と資源化施設全体を、「三富今昔村 (さんとめこんじゃくむら)」と名付け、環境教育等促進法に基づく「体験の機会のある場」の認定を取得しました。環境の大切さやリサイクルについて五感で学べる、サステナブルフィールドとして一般に公開、国内外から年間4万人を超える人々が訪れる場所になりました。

現在、産学官連携による DX (デジタルトランスフォーメーション) による、オープンイノベーションを展開しています。「廃域物を全て資源に変える Zero Waste Design」を創出する企業として、資源循環型社会の実現に貢献してまいります。今回は、本当にありがとうございました。

代表取締役 石坂 典子



▲くぬぎの森



▲集い (つどい) のヤマ



▲くぬぎの森交流プラザ



▲くぬぎの森環境塾



▲工場見学の様子



▲プラント内部



NPO 法人樹木・環境ネットワーク協会



理事・事務局長
後藤 洋一

東京都

1995年に「人と自然が密接に関わり豊かな持続可能な社会の実現」をめざして活動する任意団体として発足。森を育てる「フィールド事業」人を育てる「グリーンセイバー（GS）事業」森と人を繋ぐ「環境コミュニケーション事業」の3つを活動の柱としている。現在13か所で「フィールド事業」を行っている。上野動物園の緑化といった都市の緑を守り育てるもの、町田市三輪地区や大阪府交野市などの里山の保全・再生・活用。また奥山と呼ばれる八ヶ岳での宿泊型ワーキングなどがある。「グリーンセイバー事業」は、適切な環境保全や環境活動を行うために1998年に設立された資格検定で、環境について科学的な知識と共に、自然と人との関わりを学び、文化的な側面も修得することが求められる。GS修了者が各地でボランティアグループを作り、フィールドワークで中心となり活動する。「環境コミュニケーション事業」では環境問題は個人で解決できるようなものではなく、社会全体で取り組むことが当たり前となった今、企業、行政、団体と協働で、多様な活動を行う。東京都が進める海の森公園づくり事業への参画、石垣島での海の環境を守るための森づくり活動を行っている。

(推薦者：NPO 法人かながわ森林インストラクターの会 理事長 久保 重明)

持続可能な社会のために人と自然の関係を築く

この度は社会貢献者表彰を頂き、誠にありがとうございます。

私たちが活動をはじめたのは1995年。環境問題が大きな課題として社会的にも認知されつつある時代でした。人々の関心が高まると同時に市民活動も盛んになりましたが、自然に関する知識や経験の不足から、誤った環境保全が行われる事例も見られました。そこで私たちは、正しい知識を身に付けて環境保全に取り組む人材を育てることを目的に、グリーンセイバー資格検定制度を設立。検定合格者を中心に、各地で環境保全活動をスタートしました。

設立から25年。環境に対する人々の意識や社会状況は大きく変化しています。その中で私たちは、社会のニーズに対応しながら、「森を守る」「人を育てる」「森と人をつなぐ」という大きな3つの柱を軸とした活動を、変わることなく続けてきました。現在13か所の森や緑地の保全活動を行っており、グリーンセイバー資格取得者も4,000人にのぼります。このような地道な活動が功績として認められ、社会貢献団体として表彰していただくことができたのは、これまで活動を支援して下さった皆さま、活動を推進してきたグリーンセイバーや会員の皆さまのおかげです。支えて下さった皆さまには、どんなに感謝してもしきれません。

SDGs が提示しているように、防災、循環型社会、生物多様性の保全、地球温暖化の抑制から、教育、雇用まで、多岐にわたる分野で森林は持続可能な社会にとって重要な土台を担っています。森林や自然環境が人類社会にとって必要なファクターであることは、10年前の東日本大震災、そして、現在の新型コロナウイルスの感染拡大が

らも読み取ることができますが、その意味合いは少しずつ変わってきているようにも見えます。

このような状況において、私たちの活動も、より広く多様なものになりつつあります。すでに、石垣島ではサンゴ礁の復活を助けるための里山づくりをはじめています。海に面した地域で、継続的に人が利用し、管理する森を作り育てていくことで、耕作放棄地からの赤土の流出を防ぎます。地球温暖化を抑制し、陸の豊かさを守るための森は、海を守る森でもあるのです。

この活動を含め、まだまだこれから進めていくべき活動はたくさんあります。人と自然が密接に関わり、森を育てて利用することで、結果として豊かな自然が保たれる。自然とよりよい関係を築くことが、持続可能な社会につながる…。そんな社会に一歩ずつ近づいていることを信じて、今後も地道な活動を進めてまいります。

理事・事務局長 後藤 洋一



▲管理している里山の風景



▲雑木林での作業のひとつ



▲子ども向け自然体験の様子



▲親子でカブトムシの幼虫を探しています



▲親子での森林保全体験



▲石垣島での植樹

NPO 法人地域環境デザイン研究所 ecotone



代表理事

太田 航平

京都府

京都で、環境まちづくり・仕組みづくりを専門として2001年より持続可能な地域づくりを市民・事業者・行政と協働のもと展開してきている。昨今、社会的に問題となっている“使い捨てプラスチック”問題に早くから警鐘を鳴らし、「脱・使い捨て」を掲げてきた。中でも、日本の三大祭りのひとつである祇園祭で「祇園祭ごみゼロ大作戦」を立ち上げ、夜店や屋台で使われている“使い捨て容器”を何度も繰り返し洗って使える「リユース食器」に切り替える活動を実施。約2,000名を超えるボランティアスタッフを集め、リユース食器の回収や資源の分別作業等を行う場所（エコステーション）を計画的に設置したことで、2014年、ごみの4割減量に成功。この取り組みをもとに、大阪の天神祭でも2017年からリユース食器の導入を始めた。

年間、約400のお祭りやイベントでのリユース食器を活用した環境対策の支援をしているが、リユース食器を導入するお祭りやイベントはまだ少ない。温暖化、海洋プラスチックごみ（廃プラ）対策が問題となる中、環境に配慮した生活等を提案し広める活動を続けている。

（推薦者：NPO 法人リボン・京都）

この度は、栄えある社会貢献者表彰を頂き、心からお礼申し上げます。長年の活動をこのように温かく励まして下さり、現場で活躍している職員やボランティアスタッフはもちろんのこと、これまで活動を応援いただいている関係者含め、大変嬉しく思っております。

地域環境デザイン研究所 ecotone の活動の特徴は、「市民の立場」から「地域」を変えていくことにあります。今や「持続可能な社会づくり」は国際社会のキーワードになりました。そのためには「経済・政治等の社会システムの変革」と「人々のライフスタイルの変革」が必要不可欠です。しかし、社会システムは国の仕事であり、ライフスタイルの変革は個人の課題と考えられがちです。また、「地球規模で考え、地域で行動を（Think globally, Act locally）」という有名な標語があります。日本においてこれは、「地球環境問題は大きな課題なので、地球規模に考えつつも地域でできることをしていこう」と解釈されがちです。しかし私たちは、地球環境問題を引き起こす、人々の生活と経済活動の基盤となっている「地域」を変えることこそが問題の解決につながる、と考えています。たとえば地球温暖化問題といった一つの問題だけではなく、複数の環境問題や経済、社会的公正などの側面も含めて総合的に取り組んでいます。これは、環境問題そのものが一つの課題を解決しただけでは解決しきれないためです。

そのような考えのもと私たちは、20世紀型の産業構造である大量生産・大量消費・大量廃棄システムの変革や、人々のライフスタイルの見直しを図る仕組み／選択肢づくりなど、市民の立場から調査・研究・実践活動を展開してきました。



これまで長年取り組んで来ている活動の一つに、さまざまなお祭りやイベント向けに、リデュース（発生抑制）・リユース（再使用）の視点を盛り込んだ環境対策があります。短い時間の間に大量に発生するごみの原因となる「使い捨て容器」の代わりに、繰り返し何度も洗って使用可能な食器を「リユース食器」と名付け、屋台など飲食店に導入し、ごみの減量を具体的にサポートする活動です。このそもそもごみを発生させない仕組みづくりは、私たちが活動の拠点としている京都から全国に広がってきました。今では、地域のイベントからロックフェスティバルなどの商業イベント、さらには日本三大祭である京都の祇園祭や大阪の天神祭などにも導入されるに至っています。この広がりの中には、たくさんの方の協力や応援がいつもあります。

今回の受賞を励みに、これからも持続可能な社会の実現を目指し、市民の立場から、事業者や行政とのパートナーシップのもと、さらに活動を広げていきたいと思っております。ありがとうございました。

代表理事 太田 航平



▲多くのボランティアスタッフと共に活動をしています



▲大規模イベントでもリユース食器の輪が広がっています



▲若手のリーダーを研修を通して養成



▲給水スポットの設置を通してペットボトルの削減を展開



▲リユース食器はみんなで洗浄

有限会社アップライジング



代表取締役社長
齋藤 幸一

栃木県

新品・中古タイヤ・アルミホイール買取・販売の専門店。「考え方が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば人生が変わる」「人を大切に」「社会を大切に」を信念に支援活動を行っている会社。2012年から就労困難者雇用の支援活動を行っている。きっかけは、2011年から毎月1回JR宇都宮駅前の清掃を行う中で、障がい者の仕事が無いと聞き、施設外就労B型から始めて、現在は元ひきこもり、出所者、薬物中毒者等の就労困難者の雇用も受入れている。2016年からは、外国人技能実習生の受け入れと、帰国した実習生が日本で習得した技能を活かすために現地（ベトナム）に現地法人を設立する準備を行っている。労働ビザでの正社員もいる。その他、毎朝、店舗近くにある小学校の通学路で交通誘導や挨拶運動、タイヤ1本売上金のうち20円をカンボジア周辺国支援として支援プロジェクトに寄付。栃木県内の児童養護施設に子どもたちへの物資や遊具の差し入れ、社員自ら施設を訪れて一緒に遊ぶことはもちろん、プロバスケットボールやサッカーの試合観戦等に招待し、外に出る機会のない子どもたちに外に出るきっかけを作り、いろいろな体験をさせること等の支援活動を継続して行っている。

代表取締役社長の齋藤幸一さんの著書「人間力経営アップライジングの軌跡」で社会貢献の重要性を伝えている。

(推薦者：株式会社バン・アキモト)

今回、最高の式典に参加させていただきありがとうございました。当日は、私自身がこのような場所に立っていることが不思議でした。

ボクシングの高校チャンピオンから日本代表に選ばれオリンピックを目指すも挫折。大学も中退し、始めた健康食品の販売で失敗し自己破産するも、父親名義、妻名義の借金は返済し続けなければならない。友人、知人は誰もいなくなりました。本当のどん底から、中古のトラックを買って始めた廃品回収。そこから出てきた中古タイヤに活路を見出しましたが、それまでは自分の借金返済の事しか考えていませんでした。その後3.11東日本大震災の炊き出しで、利害関係のない他人が喜んでくれる事が嬉しくなり「人の喜び、我が喜び」に変わりました。そして、タイヤ販売事業も続けながら社会貢献活動に積極的に参加するようになりました。

今回の表彰された理由の一つに「就労困難者の雇用」が入っていますが、本来、僕自身が就労困難者なのです。日本という恵まれた国に生まれたのだからこそ、どん底に落ちたとしても何度でもやり直せる。親からのひどいDVを避けるために児童養護施設で育つも、施設を出た後は社会になじめず、ゴミ屋敷に住みながら生活保護をもらっていたO君。当社に入り人間的にも成長しゴミ屋敷を片付け、生活保護の需給も辞め納税者になりました。薬物依存更生施設、栃木DARCから入ったIさん。薬物に手を出してからは、友人、知人は離れていき、家族からは勘当されて15年間、連絡もとれていない。当社に入って生活保護の需給も辞め、納税者になり栃木DARCの施設も出て一人暮らしを始めています。

アップライジングは毎日の朝礼で親や祖先に感謝するための時間を2分間取って

ます。前者のO君はひどいDVを受けていた親にも感謝する事が出来て仲直りし、彼女が出来た事や、現在の状況を話に行くようになりました。後者のIさんも親に感謝する事ができるようになり、15年ぶりに実家に電話をしました。お母さんが電話に出て2年前に父親が亡くなっていたことを知りました。その会話で仲直りができ15年ぶりに母と姉と再会、父親のお墓参りに行きました。Iさんはアップライジングで社内恋愛後、結婚し息子も出来ました。このようにアップライジングにかかわった人たちが親、祖先に感謝出来るようになり、人間力を上げて行く事が一番幸せを感じる部分です。

今後もこのような事例も出し続けながら社会のお役に立てる会社にしていきます。どんな時でも、何度でもやり直しができる。再チャレンジしやすい社会の実現も目指していきます。

代表取締役社長
齋藤 幸一



▲人間力経営アップライジングの軌跡



▲足利市での清掃活動



▲里親募集成功61匹



▲挨拶運動



▲外国人の雇用



▲技能実習生と一緒に清掃活動



▲技能実習生の活動現場

NPO 法人子どもの家足立



理事
竹中 ゆきはる

埼玉県

少年院を出院したのち、自力で電気工事士試験に合格し、大学入学資格検定を取得し、27歳で大学の工学部にも合格した竹中ゆきはるさんは、自身と同じような経験をしている少年たちの立ち直りを支援したいと考えていた。数々の電気関連の資格を取得し自身の電気工事会社を設立し代表取締役として業務をしながら、2005年に長年竹中さんを担当してくれた保護司の推薦を受け協力雇用主となり、更生しようとしている少年に職と住まいも提供するようになった。2009年には保護司の委嘱も受けた。2011年に更に手厚いケアをしようと自立援助ホーム「NPO 法人子どもの家足立」を設立し、従業員や家族の協力を得てこれまでに延べ46人の自立を支援し、24人に就労の支援をした。

竹中さんは、少年たちに資格取得を目指す目標を持たせ、仕事に就いて自立できるよう、電気工事士の職業訓練を無償で教えている。自らもそれを立証するよう、数々の資格を取得し、少年たちへ生き方を体現している。

(推薦者：NPO 法人ローゼンベル)

冬になると自立準備ホーム NPO 法人子どもの家足立に電話が鳴り響きます。親に何らかの事情を抱え恵まれない環境の非行少年少女を保護してくれないかと相談が来ます。どうして冬は相談の依頼が多いのか最初はわかりませんでした。「寒いから」です。寒くて凍死してしまうからだと後から知りました。「公園で寝ている少年にせめて温かい布団で寝かせてあげたいのですよ」と言った保護観察所の所長の言葉が忘れられません。

子どもの家は元暴走族総長で東北少年院経験者が立ち上げた NPO 法人です。東北少年院の電気工事科で第2種電気工事士を取得させてもらい電気工事で株式会社を立ち上げることが出来ました。個人事業主から有限会社に法人化したころ、14歳からお世話になっている保護司先生に推薦していただき協力雇用主になることが出来ました。電気工事だけで少年たちを引き取るのは限界があると感じた社長が保護司になったころに知った三大環境調整である「身元引受人・住居・就職先」のうち就職先は他の社長たちにお願ひして、身元引受人と住居と食事の提供に修正して受け入れを多くしていきました。現在、電気工事会社では3人が電気工事士の資格を取得して現場に出て職長として独立を目指して頑張っています。独立した少年のうち、一人は鳶職で、もう一人は電気工事の個人事業主で頑張っています。相談の電話は長くてコンサルタント料金をもらいたいぐらいですが、頑張っている姿をうれしく思っています。

身の回りの世話は愛妻と妻の母が寮母として頑張ってくれています。あるとき、妻に家庭環境の恵まれない非行少年を引き取ることもより自分の家族に目を向けてほしいと言わない理由をたずねてみると「今、私がやっていることは将来の日本を良くしているの。それはいずれ私たちの息子と娘の将来でもあるから犯罪者のいない、被害



者もない世の中にするを少しでも子どもたちのためにしないと子どもたちがかわいそうでしょ」と寮母としての考えを述べてくれました。子どもの心（ハート）が死なない世界を、地域が少しでも明るい社会となるよう努力していきます。

最後になりましたが、この度は社会貢献者表彰を賜りまして本当に感謝いたします。ありがとうございました。自分たちがやっていたことはエゴではなく活動して、やり続けていいんだと承認されたように思えて、これからも精進していこうと新たな気持ちになれました。

スタッフの皆様また推薦してくれた保護司先生、本当にありがとうございました。家族5人で過ごせた2日間は夢のようなプレゼントでした。

協力雇用主・保護司／理事 竹中 ゆきはる



▲竹ノ塚東口飲み屋街でゴミ0運動中



▲竹ノ塚東口駅ロータリー ゴミ0運動中



▲竹ノ塚 協力雇用主寮 引き受けた少年が利用する個室



▲竹ノ塚 協力雇用主寮 キッチンも備わっている

村田 純子



福島県

障がい者が低賃金で働くことが常態化していた社会に一石を投じた、ヤマト運輸の元会長の小倉昌男氏の経営哲学に影響を受けた村田さんは、南相馬市で精神障がい者が生き生きと働ける場所、障がい者と健常者が隔てなく働ける場所を作ろうと小規模作業所「ほっと悠」を設立。作業所で大人用おむつを販売、地元の病院や競合の大手卸業者を集めて説得し販路まで獲得してしまう。このほかヤマト運輸のメール便の配達や精神病院内の売店とカフェの運営、作業所を兼ねた弁当の製造販売厨房や割烹など、次々と障がい者が働く場所を作り出し、多くのメンバー（障がい者）とスタッフを抱えるまでになる。こうした努力によりメンバーの平均労賃は37,000円と地域トップになる。

その後、東日本大震災による原発事故によって皆散り散りになり、村田さん自身も被災して寝たきりの母親を抱えながら施設は閉鎖寸前に。しかし、居場所を求めて戻ってきたメンバーのために再始動を決心。内職仕事をかき集めて郡山から南相馬へ運ぶ日々。その後、相談支援センターをはじめ弁当作りの作業場や販売、区役所内の喫茶店など、不屈の精神で次々と就労先を増やし復活。赤字の作業所分は稼ぎの多い作業所で補てんし全体での運営をすることによりメンバーへの賃金を確保。障がい者が無理なく助け合って地域社会と繋がることができ、障がい者と健常者の垣根をなくすために、常に前を向いて活動している。

(NPO 法人チームふくしま/株式会社クラロン)

この度は、栄誉ある社会貢献者表彰を受賞させていただき、心より感謝申し上げます。

私は、障がいを持ったご家族から「作業所を作って欲しい」と頼まれましたが、資金が無いので自宅の自分の勉強部屋から小規模作業所を作り、現在に至っております。

その当時、会社関係の方々や関係機関、障がい者施設、ハローワークの方々の集う会合があり、その時、会社の社長さんたちが発した言葉が、私の決意を固く致しました。精神障がいを持つ方々にとっては、就職が困難な時代で、社長さんたちの口から発せられた言葉は、「薬を飲んでいとなあ…」「病院に通っているとなあ…」という雇えない理由ばかりでした。

私自身、小さな頃から人を差別するのが大嫌いな性格で、その言葉を聞いた時に「よし！それでは、この「ほっと悠」という作業所で時給700円をやってやろうじゃないか!!」と心に刻んだのでした。そして、私自身が各所で学んだ事、思いやりを持つ・感謝する心を持つ、そして、ほう（報告）・れん（連絡）・そう（相談）などを伝えて、どこでも通用する「人間力」のある人づくりをしよう！と決意しました。また、私自身の生き方、「人さまの喜ぶこと & 人さまのお役に立つこと」をやり続ける「ほっと悠」を作りたい！と思ったのです。

営業はできない性格ですが、頼まれたら一生懸命やる性格、それが功を奏して毎年々頼まれて病院内の「売店 & Café ほっと悠」や割烹のような「食彩庵」そして町中広

場の「SHOP ほっと悠」と障がいを持つメンバーさんたちの働く場ができ、東日本大震災の起こる前年には、平均工賃37,000円と県内トップに躍り出たのでした。

しかし、東日本大震災で津波ばかりでなく原発事故で、障がいを持ったメンバーさんは、60名が5名に、スタッフも32名が4名になってしまいました。再度、ゼロになった所からお弁当や資源回収・メール便など、メンバーさんとスタッフが一生懸命汗して、お客さまに感動していただく、喜んでいただく、と手を取り合って働いたお陰で、自立するための高い工賃も得る事ができるようになりました。

これからも、「人さまの喜ぶこと & 人さまのお役に立つこと」をやり続け、メンバーさんやスタッフたちが、一番の究極の幸せ①人に愛されること②人にほめられること③人の役に立つこと④人から必要とされることを得られる「ほっと悠」を創り続けていきたいと思っております。

この度の受賞も神さまは、見ていて下さると感謝している自分です。

村田 純子



▲メール便 印付け



▲缶分別



▲食房（弁当作り）



▲内職（リード延ばし）



▲内職（穴開け）

山本 忠



愛知県

山本さんは、豊橋市民病院で歯科医師として勤務しながら、1995年から長きに亘ってベトナムのハノイ、フエ、タムキ、ベンチェ市などで口唇口蓋裂の患者を無料で手術する医療支援を行っている。この先天性異常に対しては差別もひどく、生まれた時点で殺されてしまう人もいるが、山間部の貧しい少数民族では手術を受けられずに成人する人も多い。現地の医師に技術指導し、難易度により任せられる割合を少しずつ増やしてきたが、現在では見守るだけでよいことも多い。お金を払える患者は現地の医師が治療し、貧しい患者は山本医師がまとめて無料で治療しており、一度の滞在で30名～50名の患者の手術をこなす。こうした状況が支援をやめられない理由でもある。薬や点滴は日本から持参するが、病院側へは検査費などを支払う。少数民族は言葉が異なり通訳者同伴で訪れるので、患者には通訳代、交通費、滞在費なども渡す。負担は大きいのが患者が笑顔になって帰っていく姿を見ると力になる。

毎回4、5人のチームで行くが、渡航費は各自が負担し、それ以外の現地費用は全て山本医師が負担している。また現地の病院では手術台をはじめ麻酔機などの医療機器が不足しているため、口腔外科に関わらず病院に必要な医療機器を日本で調達し、これまでにコンテナ7本分を船で送るなどして現地の病院全体への功績もかなり大きい。今後は現地の若手医師への技術指導にも力を注ぐ。

(推薦者：広瀬 紀子)

ベトナムでの医療ボランティア活動

1995年からベトナムのメコン川下流にあるベンチェ省の病院で口唇口蓋裂児の手術を行い現地の口腔外科医に技術移転を行っています。豊橋市民病院の移転に伴って使用しなくなった、手術に必要な手術台、無影灯、麻酔機、心電図計（モニター）などを譲り受けてコンテナで送り、現地で使用可能にしました。

2000年からベトナムの中部地方の貧しい省であるクアンナン省の病院に行っています。ベンチェ省と同様、最も多く枯葉剤が散布された地域です。この病院はベトナム中部のダナン市から南に車で2時間、農村と西に山村を控えたクアンナン省タムキー市の病院です。現地の口腔外科医に技術を完全にマスターできるよう術前、術中、術後を現地口腔外科医、医師に任せて行うことに努めています。もちろん現地の麻酔医、看護師の協力を得て手術が彼ら自身で出来るようになる事とその体制を作る事が目標です。手術に必要な器材は多く不足していました。日本から中古の器材を集め修理して使える状態で送っており、徐々に充実してきています。さらに2000年から国際ソロプチミスト豊橋と田原ロータリークラブから毎年援助をいただき活動が軌道に乗り、患者さんが広い範囲から集まり待っていてくれるようになりました。現地医師たちもかなり手術ができるようになってきました。現地医師への十分な技術移転が出来たと思っています。現地のことは彼らが行う、このことが一番大切なことと私は思っています。今後も毎年現地に行き、私は現地医師の技術移転に励みます。



もう一つの事業として、この病院の設備、特に手術室の充実に取り組みました。手術件数も毎年増加しています。病棟も増築され、外来棟も大きくなり、中核病院らしくなりました。日本から医療器材（中古、新品も含めて）をコンテナ7本を送りました。トヨタのご協力により救急車も1台贈りました。事業にはお金がかかります。私を応援、支援して下さる多くの皆さんに感謝しています。手術を受けた子どもたちに微笑が見られるようになっていくことを皆様に伝えたい。

近い将来、ベトナムの医師により手術がされるようになるでしょう。体力の続く限りベトナムに行く予定です。患者さん本人、家族の微笑顔が私には一番の勲章です。微笑顔に会える日を楽しみに!!

この度は、大変ありがとうございました。

推薦して下さいました広瀬紀子先生はベンチェ省での手術の麻酔医として参加した仲間です。

感謝

山本 忠



▲ベトナム政府からの勲章



▲ベトナム新聞に掲載（2012年）



▲寄贈した救急車と医療器材のコンテナ



▲薬剤の入ったダンボール



▲技術の移転



▲寄贈した麻酔器での手術

認定 NPO 法人ザンビアの辺地医療を支援する会



理事長
日高 良雄

宮崎県

2012年からアフリカザンビアで病院やヘルスセンターから遠く離れた僻地で十分な医療を受けられない人々への巡回診療を行っている。会の現地活動部隊の山元医師は JICA 専門家としてザンビアで地域保健医療にも携わった経験を持ち、のちに現地の医師免許も取得。

現在、病院やヘルスセンターへ行く移動手段のない4つの地区へ巡回診療に赴き、診療も薬も全て無償で提供している。山元医師は3か月ごとに日本とザンビアを行き来し、日本の会スタッフと連携し、講演や日本での医師活動もしながら支援活動を行っている。

現地では巡回診療のみならず、安全な水を確保するための井戸掘りや、住民啓発、マラリアで亡くなる人を減らすため、政府の協力も得て殺虫剤の散布を行うなどし、この地区では特にマラリアで亡くなる子どもの数が減少し成果を見せている。また、日本の医学生や研修医を受け入れて現地の巡回診療に同行させ、医療状況について学ぶ機会を提供している。今後は、僻地にヘルスポスト（簡易診療所）を作り、少しでも安定した医療環境を提供できるようにしていくことを目標としている。

(推薦者：日高 良雄)

この度、公益財団法人社会貢献支援財団から社会貢献者として、当法人が受賞の榮譽に預かり、大変嬉しく、また心から感謝申し上げる次第です。

式典には、残念ながら新型コロナウイルス感染症の感染拡大があり、出席予定の当法人理事も地域で医師として活動していることから、出席を断念させていただきました。全国から受賞された他団体の皆様と会場にてそれぞれのお立場での経験をお聞きできなかったことは重ねて残念に感じております。

当法人は、JICA 専門家としてザンビア共和国の地域保健医療向上に尽力した経験の中で、都市部との生活格差が大きく最低限の医療にもアクセスできない辺地にいる人々に対し、巡回診療を行うことでその改善に取り組みまれてこられてきた山元香代子医師の活動を支援するため、2012年7月に設立しました。

首都ルサカに事務所を構え、当初は車で片道約5時間を要するチサンバ郡ルアノ地区（水、電気がなく、人々は小川の水を飲料に使用している地区）に月2回の巡回診療を開始しました。診療はカヤぶきの小屋を借り、1室を診察室（診察は山元医師と現地準医師）、その隣の小部屋にわら敷きの寝台で妊婦健診室（助産師対応）とし、別の1室で受付・薬剤の配布など、すべて無償で提供してきました。その後、対象地区が増え、現在はルアノ、ニャンカンガ、サンダラ、リテタの4地区にそれぞれ月1回、巡回診療に出かけています。

有り難いことに、その活動がテレビ放映にて紹介され多くの方から寄付金が寄せられたことで、2014年、安全な飲料水が利用できる深井戸をルアノ地区に掘削したことを皮切りに、各地区合計20基の井戸を掘削することができました。さらに、保健省認



定の研修を地区住民に実施、コミュニティヘルスワーカー（CHW）として養成、彼らが巡回診療と次の診療の間にマラリア感染の疑いの患者などに対する検査と治療を実施できるようになりましたし、雨季の蚊の発生によるマラリア感染を防ぐため、マラリア蚊殺虫剤噴霧事業も開始しています。

2019年末までに約32,000人の診療を行ってきました。当初はマラリア陽性率が非常に高率でしたが、住民啓発や蚊帳の配布等も行ってきたことなどから陽性率は低下してきました。そして何よりも、巡回診療や、次の診療までの間のCHWの検査・治療などにより、子どもを含めマラリアで亡くなる人が激減し、2016年、2018年は亡くなった人が報告されていないことは誇ることでできる活動の成果です。

現在、ザンビアでは、経済状況の悪化が認められています。そのような中で新型コロナウイルス感染症の感染拡大もあり、巡回診療を継続することが厳しい状況となっていますが、多くの方の支援をいただきながら、今後とも現地の方々と力を併せ活動を進めていきたいと考えております。

理事長 日高 良雄



▲巡回診療に集まった人々



▲マラリア蚊殺虫剤噴霧作業の様子



▲コミュニティヘルスワーカー養成講座の受講生達



▲マラリア検査の様子



▲山元先生診察の様子



▲巡回診療中マラリアで倒れた子供
(検査陽性、治療で元気になりました)

パグサンハン児童救援協会



代表
田ヶ谷 雅夫

山梨県

1993年、社会福祉法人ぶどうの里「勝沼授産園」の初代施設長田ヶ谷雅夫氏は、フィリピン在住の知人を訪ねた際、同国のパグサンハン地区で横行している児童買春を目の当たりにし、現地のボランティアの団体を支援して、同地区での児童買春を減少させるための活動を始めた。その後、オロンガボ地区で児童養護施設「プレダ子どもの家」を運営し、ストリートチルドレンの救済活動をするシェイ・カレン神父を知り、パグサンハン地区の児童買春の減少と併行してオロンガボ地区のストリートチルドレンの救済のため神父への支援活動を開始した。フィリピンで国やマニラ市からの支援はないなか、パグサンハン地区の児童買春防止のためにはパンフレットの作成や配布による啓蒙活動、また現地関係者を日本に招いて講演活動を行っている。オロンガボ地区のストリートチルドレンの救済のために、「子どもの家」の入所児童劇団の日本公演や山梨県下や県外から寄せられた衣類や日用品等の支援を毎月行っている。

(推薦者：社会福祉法人ぶどうの里 勝沼授産園)

私たちパグサンハン児童救援協会が発足したのは、平成6年です。協会創設者田ヶ谷雅夫は発達遅れの人たちの福祉事業に長年携わってきましたが、たまたまフィリピン・パグサンハン市に住むハニー・ロジャースさんという障害児をもつアメリカ人女性から「当地では児童売買春が公然と横行している。その根絶のために日本人にも協力してほしい」という依頼があったことから、私たちの活動が始まりました。

児童売買春は、子どもの全人生をめちゃくちゃにしてしまう邪^{よこし}まな行為で、絶対に許すことはできません。しかし観光を主産業とするパグサンハン市は、貧困に基づく児童売買春のメッカとなっていました。顧客はオーストラリア、アメリカ、ドイツなどからやって来る児童姦異常性愛者で、最近では日本人の姿も見られるようになりました。

彼らは僅かなカネを親に支払って、小さい子どもをホテルに連れて行き、さまざまな淫行を繰り返すのです。これは人間として放置できる事態ではありません。ハニー・ロジャースさんをはじめ現地の有志とともに支援活動や財政援助を続け、表面的には事態は改善されつつあります。

そこで私たちは、同じフィリピンのオロンガボ市で児童売買春絶滅に挺身するシェイ・カレン神父の支援も開始しました。同市はかつてアメリカ海軍基地があったため、パグサンハン市同様、児童売買春が今なお後を絶ちません。同神父は養護施設「プレダ子供の家」を建設し、多くのストリートチルドレンや児童姦被害児童を保護しています。けれどもフィリピン政府からの公的援助は一切ありません。

私たちは同施設に長期的な資金や物資援助を現在まで続けています。米・砂糖・食用油・菓子などの食料品や学用品・スポーツ用品・玩具・衣類などです。また会員グ

ループが同施設を訪問してワークキャンプを実施したり、カレン神父を数回日本に招聘して講演会を山梨・長野・静岡・東京などで開催しました。また深く傷ついた児童の心を癒し、慰めるために、同施設収容児童10数名を日本に招待して、10日間のホームステイも実施しました。

私たちの活動は今後も継続する必要があるとあり、今回の社会貢献支援財団のお力添えは大きな励みとなりました。深く感謝申し上げる次第です。 代表 田ヶ谷 雅夫



▲ブレダ子供の家へ届いた支援物資



▲バグサンハン地区児童買春絶滅グループへ届いた支援の衣料品



▲ブレダ子供の家へ届いた支援食品



▲現地で被性的虐待を受けた児童と交流する会員



▲ブレダ子供の家入所児童を日本へ招待
10日間ホームステイする 山梨市フルーツパークにて



▲ブレダ子供の家所長シェイ・カレン神父を招いた講演会
甲府ボランティアセンターにて

Paix² (井勝 めぐみ／北尾 真奈美)



東京都

Paix² (ペペ) は2000年に歌手デビューした井勝めぐみさんと北尾真奈美さんのデュオ。二人の出身地、鳥取県の地元警察署の一日署長を務めたことをきっかけに刑務所や少年院などの矯正施設で「Prison コンサート」と称したボランティア活動を開始。2020年2月14日の京都刑務所での公演で503回を数えた。北海道から沖縄まで日本全国を音響機材と共に車で移動し、機材の設置からコンサート終了後撤去作業まですべて自ら行う。当初はじっと舞台を見つめる受刑者の様子に戸惑いの連続で、舞台の上で思わず凍り付いたこともあった。

様々な制約のある刑務所でのコンサートでは観客である受刑者に原則として認められているのは拍手のみ。しかしながら、回を重ねることにPaix²ならではの、代表曲「元気だせよ」の歌詞に載せて拳を突き上げるポーズを認める刑務所が増えている。二人は被害者の心情を常に考え、ステージでは二度と罪を犯さないように語り掛け、20年にも及ぶ活動を通じ、「継続していくことの大切さ」を受刑者に伝えている。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で刑務所を訪れることができなくなったが「居室配信型 Prison コンサート」のDVDを制作して全国の矯正施設に配信している。

(推薦者：片山 始)

【心のスイッチ】

2000年4月に、私たちはPaix² (ペペ) という歌手名でデビュー致しました。歌手になった以上、何か継続して出来ることはないだろうかと思案していたとき、ふるさとの鳥取県倉吉警察署の署長さんから、「鳥取刑務所で歌ってみたらどうだろうか」と提案してくださいました。その一言から私たちの刑務所コンサートは始まりました。

刑務所という特殊な場所ですから実施までには様々な制約があります。情報管理やセキュリティに神経を尖らせている施設ですから「はい、そうですか」と許可は出ないのです。私たちが日本海テレビジョンに毎週出演していたこともあり、鳥取刑務所の職員の皆さんが顔を知ってくださっていたことが幸いして…「是非お願いします」と最初のコンサートが決まりました。

矯正施設(刑務所・少年院)での活動を始めて間もない頃、まだ若い女性歌手が刑務所でコンサートをするという事が珍しかったのだと思います。鳥取刑務所で実施したことが各地の刑務所に伝わりました。そして、徐々に依頼が舞い込むようになり、いつの間にかその回数は500回を超えました。

全国の矯正施設でコンサートツアーを継続していこう、そう決めたときにみんなで約束したことがあります。それは「お金が無いからと言って途中で止めない」という事です。刑務所への移動手段は、網走から鹿児島までは原則として車です。重い音響機材一式を積んでマネージャーと3人での移動です。少ない営業活動で蓄えては、依頼された刑務所・少年院に向かいました。お金がなくて高速道路を走ることが出来ず、一般道でひたすら長距離を走ったこともありました。長い間留守をして帰宅したら電気もガスも止められていたことも…。今振り返れば笑えるエピソードですが、不思議と、苦しいから止めようかと思ったことは一度もありませんでした。

矯正施設でのコンサートは概ね体育館で行われます。殺風景な体育館に整然と並ん



だ空間には、静寂と熱気と後悔が渦巻いています。それは、会場の皆さんの目から伝わって来るのです。受刑者の皆さんと、時間と空間の共有をするのですから「心のスイッチを押したい」その一念です。塀の中にいらっしゃる皆さんは一般社会のように情報が沢山あるわけではありません。一言一句逃すまいと何百人もの目が舞台に向けられています。

人の心が動くのはどんな瞬間なのか…。メッセージコンサートは舞台と客席の真剣勝負です。音楽で人の心が動く…。その瞬間が少しずつ解るようになりました。人にはそれぞれ心の中に感情のスイッチがあります。客席いる皆さんが涙を流す瞬間をたくさん見てきました。その涙こそ、心のリメイクの瞬間ではないかと私たちは感じています。私たちのコンサートからたった一人でも良いのです。「本当の幸せとは足元にあったんだ」と気が付いてもらうことが出来るなら…。

決して有名でもなく、資金があるわけでもありません。塀の中の皆さんから拍手というエールをたくさんいただいたからこそ、今日まで歩いて来れたのでしょう。

大変なご苦勞をされながら、社会貢献活動をされている方々が沢山いらっしゃる中、このような立派な賞に選んでいただきました事を心より感謝申し上げます。この賞に恥じないよう、これからも活動を継続して頑張っ参りたいと思います。本当にありがとうございました。

大変なことは数限りなくありましたが、神様は見ている。「苦勞は必ず報われるんだ…」と思うことが出来ました。Paix² (ぺぺ)

井勝 めぐみ・北尾 真奈美 (共著)



▲2016.12.10 音響機材セッティングの様子 (千葉刑務所)



▲2017.2.22 奈良少年刑務所 自力更生碑の前にて



▲2003.7.12 55回目 Prison コンサート風景 (鹿児島刑務所)



▲2004.11.6 Prison コンサート100回目記念にて (松山刑務所)



▲書籍「塀の中のジャンヌ・ダルク-Paix²プリズン・コンサート500回への軌跡」



▲2020.1.18 500回目 Prison コンサート風景 (横浜刑務所)

NPO 法人アニマルセラピー協会



代表
中川 久美

広島県

創設者で代表を務める中川久美さんは、当時アニマルセラピーを行う団体がない広島県で、ケアマネージャーをしていた経験を活かし、専門学校に通い、県内初の団体、特定非営利活動法人アニマルセラピー協会を2013年に設立した。

毎月30回、ほぼ毎日、ボランティアやスタッフと犬5匹で、老人ホーム・障がい者施設・病院やイベント等に出かけ、犬とのふれあいを通して、認知機能の改善や、コミュニケーション能力の向上に向けた活動を行っている。利用者からは、犬を初めて触る緊張や、昔飼っていた記憶が蘇る等、癒されつつも刺激となり、大変喜ばれている。

また、大学とのドッグセラピーの研究を通じて、アニマルセラピーの診療的治療の有効性を実証している。

(推薦者：NPO 法人アニマルセラピー協会)

2006年に立ち上げたNPO法人で、元々介護系の仕事をしていました。その後、患者様や利用者の方で、寂しい思いや歳をとって、自分がどうなるかわからないので、猫や犬を飼えないと思う方も増えて、動物に癒やされる事を自分が一番体験して、皆様にも同じ思いの方がいるのでは？と、考えてドッグトレーナーの免許を取得して始めました。

犬は、人間にない共感性をもっているのだから、見ると尻尾を振る、ゴロンと横になる。かわいい目で見つめられると、本当に癒やされます。時には、おやつをあげていただいたり、散歩に行ったり、ゲームをしたりと楽しく、犬たちに接してもらい、笑顔になっていただく、今日は、楽しかったと言ってもらえるように、日々訪問しています。

子どもたちの所に訪問すると、大型犬に触ることがない子どもたちが、最初は怖がる子もいますが、大人しいとわかると、しっかりと撫でてくれます。普段、動物を飼えない子どもたちにも笑顔はもちろん、動物の接し方やおやつのやり方などを見せる事で学べる事もあるので、触れ合いながら犬の事を知ることができると思います。

老人ホームなどの訪問の時には、涙を流して喜んでくださったり、昔飼っていた犬の事を思い出して、昔話をしてくださいます。動く手で、動かない手を持って、触ってくれようとしていたり、進んでゲームに参加して、犬に指示を出して遊んだり、おやつをあげたりと、「来るのを待っていたよ」と早めに開催部屋に来てくださったり、玄関までお見送りしてくださったり、人間だけでは引き出せない事を犬たちはしてくれます。

障害者の方にも、数多く訪問させていただき、犬に手作りのネックレスのプレゼントを頂いたり、名札を作っていただいたりと、本当にありがたいことです。

これからも、いろんな方に知っていただき、皆様に喜んでいただけるように、楽しく笑顔で訪問していき
たいと思います。

代表 中川 久美



▲くろん



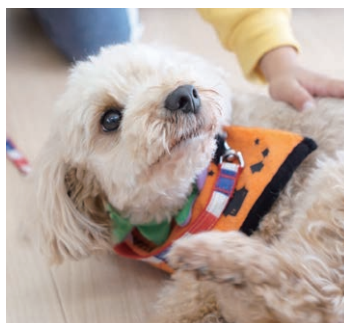
▲防災



▲pagu



▲もも



▲マロン



▲シウナ



▲なな



▲ろん

